

## ある日の食卓

旅行から帰ってきたおじいちゃんが、「伊勢エビ」をお土産に買ってきました。発泡スチロールの箱を開けてみると、生きたままの伊勢エビがガサガサと動いています。家で初めて見る生きた伊勢エビに家族は大喜び。小学生の子どもたちは大はしゃぎです。

「今夜はご馳走やね。」

「刺身がいいな。」

「ポイルしたエビもいいな。」と会話が弾みます。

いよいよ夕食の支度を始める時間になりました。いつもはお母さんに食事の支度を任せっきりののに、今日は皆が台所をのぞきに來ます。

発泡スチロールの箱から、伊勢エビを取り出そうとすると「ギギー、ギギー」と、鳴いて抵抗します。ようやくまな板の上に乗せたと思ったら、ものすごい力でピョンと跳ねて、台所の床の上を跳ね回るあり様です。

「早く捕まえて！」とお母さんが叫びます。子どもたちも大騒ぎしながら、こわごわ伊勢エビを捕まえます。

やっとの思いでまな板に伊勢エビを乗せ、子どもにも押さえるのを手伝ってもらいながら包丁を入れます。必死に抵抗する伊勢エビの力強さを肌で感じ、さすがに大はしゃぎしていた子どもたちも「かわいそうやなあ。」と表情を曇らせました。

ふと気がつくと、おじいちゃんの姿は台所にはありません。

「おじいちゃんはどこへ行ったの？」と子どもがあたりを探すと、お仏壇の前で手を合わせているおじいちゃんの姿がありました。

子どもたちも手を合わせながら、いつまでも動いている伊勢エビをじっと見つめていました。さらにもう一尾は煮えたぎった湯の中へ生きたまま放り込みます。もう子どもたちも言葉がありませんでした。

準備が整い、わが家では珍しく豪華な食卓となりました。みんな揃って席に着きます。

いつもは「いただきます」と同時におかずをつまんでいる兄が、「『いただきます』というのはこういうことなんやな。」とつぶやきました。

また、弟の食べ方を見て「殻にまだ身が付いているからちゃんと最後まで食べなあかん。」と兄が弟を諭します。弟も「わかってる。」と、もう一度殻を手にして食べています。

そんな様子を見て「子どもながらに『命をいただくことの意味』を感じてくれたんだな。」と嬉しく思いました。

おじいちゃんのお土産のご馳走をいただきながら、「命の大切さ」を味わった食卓でした。